

魂 の 歴 程 (7)

—Bonaventura, *Itinerarium mentis in Deum* 第7章 翻訳と註解—

長 倉 久 子

精神の安息と平和を求めてアルヴェルナ山に引き籠り、聖フランシスコの奇跡的事蹟に思いを馳せつつ、ボナヴェントゥラはこの神への精神的旅路の構想を練った（序文2節〔『南山神学』5号、1982、p. 81~82〕；本章3節）。聖人を師父と仰ぎ、彼に倣おうとする兄弟達の取りまとめ役として重責にあったボナヴェントゥラは、聖人の晩年に起ったアルヴェルナ山での脱我境を、人間が現世に於て到達した最高の境地として、ここに至る道程を兄弟たちのために哲学的・神学的博識を駆使して叙述しようと試みた。そして我々は、ボナヴェントゥラが、恩寵の援けを祈り求めつつ自然本性的に与えられた諸能力を十分に発揮して、被造界（神の痕跡としての感性界と神の像としての人間精神）を通して創造主なる神を見出し、そこに働く神を考察するように、そして続いて「在る」という名称と「善きもの」という名称に拠って神そのものを考察するように兄弟たちを招くのを見た。この感性界から人間精神へ、そして更に神へという上昇の段階のそれぞれの営みをボナヴェントゥラは観照（speculatio）と呼んだのであるが（第1~6章。speculatioの意味については序文註32〔南山神学』5号、p. 90~91〕参照）、この最終段階においては、以前に到達されたものを観照しつつもこれらを超越することが求められる。ここでは超越する神の知的観照ではなく、超越神との全人格をあげての出会いが求められているのであり、一切を超越する神との出会いのためには、人間の自然本性的諸能力の努力（自力）は無力である。ただ神と人との唯一の仲介者なるイエス

ス・キリストを通して与えられる神の恩寵によってのみ、そこに至る道が開かれているのである。ここでは知性に安息が与えられ、情意は自己愛を超脱して神の中に移し入れられ、神を賛えて歓ぶのである。

序文と呼応するところが多いこの終章は、美しく雄弁な文体で綴られ、「神秘神学の君」と呼ばれるボナヴェントゥラの本領が余すところなく発揮されて、感動的に閉じられている。序文に表明されたボナヴェントゥラの意図は（4節・5節，P. 83~84）、彼の勧めに従って注意深く味わって読む人において十分に達成されているであろう。

第七章

精神的にして神秘的な超出について——この段階において安息が知性に与えられ、情意（愛）は自己を超え出て神のうちに完全に没入する。

1. さて、以上六つの考察の遍歴を了えたのであるが、それは恰も真^{まこと}のソロモンの王座の六つの階段の如くであった¹⁾。すなわち、ひとはこの階段によって平和に至るのであり、そこで真の平和をもたらす人は恰も内的エルサレムにいるが如くに心静かに憩うのである²⁾。それはまた智天使^{ケルビム}の六つの翼の如くであった³⁾。すなわち、これらの翼によって真の観照者の精神は天上の知恵⁴⁾の輝きに照らされ充たされて高く上げられることができるのである。そして、それはまた（創造の）最初の六日間の如くであった。すなわち、これらの日々の間、精神は鍛練されねばならないのであり、そしてこそ終いに安息の第七日に至るのである⁵⁾。我々の精神は、自己の外に、痕跡を通し且つ痕跡のうちに、自己の内に、像を通し且つ像のうちに、そして（最後に）自己の上に、我々の上に輝いている神的光の類似を通し且つその光そのもののうちに——もちろん現世の状態で我々の精神の働きに可能な限りで——神をしかと観た後に、終に第六の段階として、第一の

至高の原理にして神と人との仲介者たるイエス・キリストのうちに⁶⁾、被造物のうちにはそれに類似したものは決して見いだされえぬ事柄、また人間知性のいかなる炯眼をも越える事柄を觀照するまでに至ったのであるから⁷⁾、残るところは、これらを觀照しつつ、この可感的世界のみならず、自己自身をもまた超越し超出して行くことである。この過ぎ越しの旅路 (transitus) においてキリストは「道であり門である。」⁸⁾ キリストは梯子であり⁹⁾ 乗物であり¹⁰⁾、いわば神の櫃の上に置かれた贖罪の座にして¹¹⁾ 世の初めより隠されていた秘義¹²⁾ なのである。

2. この贖罪の座にしっかりと向かい十字架に架けられたお方を、信仰・希望・愛・崇敬・感嘆・賞揚・崇拜・賛美・歡喜によって見つめる人は、パスカ、すなわち過ぎ越しを¹³⁾ このお方と共に行き、かくして十字架の鞭によって紅海を渡り¹⁴⁾、エジプトから砂漠に入り、そこで隠されたマンナを味わい¹⁵⁾、そしてキリストと共に墓の中で安らうことができる。ここで彼はいわば外的に死せる人の如くであるが、しかし、現世の状態で可能な限り、十字架上でキリストに帰依した盜賊に言われた御言葉、すなわち「今日おまえは私とともに天国にいるであろう」¹⁶⁾ という御言葉を心に深く感じるのである。

3. このことはまた幸いなフランシスコにも示されたのでした。つまり、フランシスコが高い山で——そこで、私は以上これまで書き述べてきたことの想を練ったのです¹⁷⁾ ——觀想し脱我の境にあった時、(十字架に架けられた) 六つの翼をもつ熾¹⁸⁾ 天使が現われたということ、師の同伴者の一人¹⁸⁾ からその同じ場所で私と他の数人が聞いたのです。この場所でフランシスコは觀想の脱我の境地に至り、神のうちに没入していったのです。そしてフランシスコは完全な觀想の模範となりました。それは、彼が以前には、行いの模範であり、第二のヤコブにしてイスラエル¹⁹⁾ であったのと同様です。そして、これは真に靈的な人々全てを神が彼を通してかかる過ぎ越しと精神の脱我境に、言葉よりもむしろ模範によって招かんが為でありました。

4. ところで、この過ぎ越しにおいてそれが完全になされるためには、諸々の知性的働きが捨て去られ、全ての情意の中枢（*apex affectus*）が神のうちに移し入れられて変容されねばなりません。しかし、これは神秘的で全く秘められたことであり、「受けた人以外に誰れも知ることなく²⁰⁾」、欲する人以外に受けることなく、聖霊の火が骨髓まで燃え立たせる人以外に欲することはない。ところでこの火はキリストが地上に遣ったものである²¹⁾。それゆえに使徒（パウロ）は、この神秘的知恵は聖霊によって啓示されたと言っているのです²²⁾。

5. こうしたわけですから、この為には自然本性は無力であり、努力によって出来るのは僅かなことです。探究に払うべき注意は僅かにし、むしろ塗油²³⁾に多くの注意を払うべきです。雄弁に向ける関心は僅かにし、むしろ内的喜びを重視すべきです。言葉と書かれたものに依るのは僅かにし、神の賜物すなわち聖霊に全面的に依るべきです。被造物には僅か或いは何も帰することなく、むしろ創造的本質²⁴⁾に、つまり父と子と聖霊に全てを帰すべきです。そしてディオニシウスと共に三位一体なる神に向って言わねばなりません。「本質を超え神を超える三位一体よ、キリスト者たちの神智の超最善の監督者よ、神秘的言葉の、凡ゆる認識を超絶し、凡ゆる光を超絶して輝く至高の頂きに我等を導き給え。そこでは新しい絶対的で変ることなき神学の秘義が、密かに告げ知らせる沈黙の闇、光を超絶して輝く闇に包まれて全く暗くおおい隠されている。しかしこの暗さは全てを超えて明らかであり、この闇は全てを超えて光輝き、そこにおいては一切が光を放っている。そして、この闇は善を超える見えざる善きものの輝きで見えざる知性²⁵⁾を満たしに満たしている。」²⁶⁾ 以上をもって神に向けられた言葉と致しましょう。そして、友に向っては、以下のように書れていますから、ディオニシウスを引用して言いましょう。「ところで、おゝ友よ、君は、諸々の神秘的直観を目指して旅路の足を堅固にし、感覚も知性の諸々のほたらきも、可感的なるものも不可視なるものも、全ての有ならざるものも有なるものも後に残し去って、無知なるものとして、一切の本質と知

を超える方の一性に、能う限り立ち帰りなさい。そしてこそ、君自身と一切のものを超え、清らかな精神の測り知れない絶対的な忘我の境によって、本質を超える神秘的闇の輝きに向って、一切を放下し、一切から自由になって上って行くのです。」²⁷⁾

6. ところで、もし貴方が、どうしてこれらのことが起るのだろうかと尋ねるのなら、知識ではなく恩寵を求めなさい。理解ではなく願望を、読書に励むことではなく祈り嘆くことを、師ではなく花婿を求めなさい。人間ではなく神を、明るさではなく闇を、光ではなくむしろ火を、身も心も全て燃え立たせ忘我をもたらず塗油²⁸⁾と灼熱の如く燃え立つ情動によって神のうちへと運び行く火を求めなさい。実にこの火こそ神なのです。そしてこのかまどはエルサレムにあります²⁹⁾。そしてキリストこそこのかまどを御自分のいとも熱く燃え立つ受難の熱情で点火するのです。それをほんとうに受けるのは、「溢られることを私の魂は選び、死を私の骨は選んだ」³⁰⁾と言う人のみです。かかる死を望む人は神を見ることが出来ます。なぜなら「人は私を見たら生きてはいないであろう」³¹⁾という言葉は疑いもなく正しいのですから。ですから私たちは死のうではありませんか。そして闇の中に入ろうではありませんか。諸々の気遣いと欲望と感覚的表象とを鎮めましょう。十字架に架けられたキリストと共に、「この世を去って御父のもとへ」³²⁾行こうではありませんか。そしてこそ、御父が私たちに示された時、フィリッポと共に「それで私たちに十分です」³³⁾と行うことができるでしょう。パウロと共に「我が恩寵汝に足れり」³⁴⁾という言葉をお聞きしましょう。ダヴィドと共に歓喜して言いましょう。「私の身と私の心は萎えた。私の心の神にしてとこしえに私の分けまえなる神よ³⁵⁾。とわに主は賛えられよ。しかして全ての民は言わん。然あれかし、然あれかし、アメン」³⁶⁾

精神の神への道程ここに終る。

註

略 号

- E₁) *The Mind's Road to God*, translated with an introduction by Boas, The Library of Liberal Arts, 32 (New York, Liberal Arts Press, 1953)
- E₂) *Itinerarium mentis in Deum*, with an introduction, translation and commentary by Ph. Boehner, o.f.m., Works of Saint Bonaventure, 2 (New York: Franciscan Institute, St. Bonaventure, 1956)
- E₃) *The Journey of the Mind to God*, translated by Jose de Vink. The Works of Bonaventure, Cardinal Seraphic Doctor and Saint, I (Paterson, New Jersey, St. Anthony Guild Press: 1960)
- E₄) *The Mind's Journey to God : Itinerarium mentis in Deum*, translated from the Latin with an Introduction by L. S. Cunningham, with an essay "Bonaventure vs. Modern Thought" by L. Brophy (Chicago, Franciscan Herald Press, 1979).
- F₁) *Itinéraire de l'esprit vers Dieu, texte de Quaracchi, Introduction, traduction et notes par Henry Duméry, Bibliothèque des textes philosophiques* (Paris, Vrin : 1960)
- F₂) *L'itinéraire de l'âme à Dieu, dans Saint Bonaventure, oeuvres présentées par le R. P. Valentin-M. Breton, Les maîtres de la spiritualité chrétienne* (Paris, Aubier : 1943)
- F₃) *Itinerarium mentis ad Deum, dans Saint Bonaventure par F. Palhoriès* (Paris, Librairie Bloud et C^{ie}, 1913)
- D₁) *Itinerarium mentis in Deum, De reductione artium ad theologiam*, Lateinisch —deutsch, Eingeleitet, übersetzt und erläutert von Julian Kaup (München, Kösel—Velag : 1961)
- D₂) *Bonaventura, Wanderweg zu Gott : Wanderbuch für den Besinn zu Gott, Am Steuer der Seele, Der Dreistieg oder drei Feuersbrunst der Liebe, Die Übertragung ins Deutsche, Besorgt von Wilhelm Hohn* (Freiburg, Otto Water—Verlag : 1955)
- S) *Itinerario de la mente a Dios, en Obras de San Buenaventura, Biblioteca de Autores Cristianos*, edición bilingüe, dirigida, anotada y con introducciones por los pp. Leon Amoros, Bernardo Apperibay y Miguel Oromi (Madrid, B. A. C., Editorial Catorica : 1945-49) tomo primero.

- 1) 『第3列王紀』(現在の聖書では第1列王紀)10章19節。本書第1章第5節(『南山神学』第7号, 1984, p. 114)参照。
- 2) 序文第4節(『南山神学』第5号, 1982, p. 81)参照。
- 3) 序文第2・第3節(p. 81~82)及び第1章第5節(p. 114)からするならば、智天使ではなく熾天使としなければならず、これはボナヴェントゥラ(或いは写本の書家)の書き誤りであることになろう(F₂は、それ故、熾天使の六翼 les six ailes du Séraphin と訳している[p. 472])。しかも聖書には六翼の智天使は出てこない。『エゼキエル書』1章6節以下に言及されている動物たち(智天使たちとも考えられている一エルサレム聖書註)は四翼である。E₃は、この二つの理由で誤りとし、クアラッキ版編集者の見落としとして指摘している。しかしながら、第4章第4節(『南山神学』9号, 1986, p. 128)・第5章第1節(『南山神学』11号, 1988, p. 60)及び第6章第1・第4・第5・第6節(『南山神学』12号, 1989, p. 57, 59, 60)を考慮に入れ、またこの章の表題及び内容と考え合わせてみるならば、必ずしも誤りとは言えない。事実、E₃以外にこの箇処に註を付しているのはE₄のみであり、E₄は、「『エゼキエル書』の智天使は四翼であるが、八世紀以降、智天使たちが六翼のものとして美術に表わされ始めた」と云っている(p. 89)。神秘神学に関してボナヴェントゥラが最も多く依拠する偽ディオニュシオスによれば、天使たちのうちで智天使たちと熾天使たちが(そして座天使たちも)神に最も近く、常に親密に神からの照らしを受けている(『天上階序論』第6章2節 PG3 201)。また、熾天使の名は燃えたたせ温める者を意味し、他方、智天使の名は知識のかたまり、智恵の溢出を意味している(同書第7章1節 PG3 205)。以上のことからすれば、ここではむしろ智天使とする方がボナヴェントゥラの意図に沿うとすら云えよう。
- 4) 智恵(sapientia)については序文註18・19・20(『南山神学』5号, p. 87~89)参照。
- 5) 第1章第5節(『南山神学』7号, 1984, p. 114)参照。
- 6) 『テモテオへの第一の手紙』2章5節。
- 7) 「観照する」(specular)については、序文註32(『南山神学』5号, 1982, p. 90~91)参照。
- 8) 『ヨハネ福音書』14章6節及び10章7節。
- 9) 第4章3節(『南山神学』7号, 1984, p. 113)及び第4章1節(『南山神学』9号, p. 125)参照。
- 10) 乗物(vehiculum)という言葉の由来は、筆者に未詳である。ヤーヴェが炎の馬車で預言者エリアを天に連れ去ったという聖書の記事(『第二列王紀』2章1~18節)からヒントを得たのであろうか。あるいはプロティノスの影響であろうか(『エネアデス』第1巻第6篇8節。『南山神学』7号, p. 126, 註36参照)。
- 11) 『出エジプト記』25章20節。
- 12) 『エフェソ書』3章9節。

- 13) 『出エジプト記』12章11節。
- 14) 『同書』14章16節。
- 15) 『同書』16章15節。『ヨハネ黙示録』2章17節。
- 16) 『ルカ福音書』12章49節。
- 17) 序文2節(『南山神学』5号, P. 81) 参照。
- 18) E₄によれば(P. 89), この証人は、レオ兄弟である。彼はフランシスコの秘書役を勤め、聖人の聖痕の証人であった。彼はボナヴェントゥラに先立ち、三年早く1271年に没した。
- 19) 『創世記』35章10節。
- 20) 『ヨハネ黙示録』2章17節。
- 21) 『ルカ福音書』12章49節。
- 22) 『コリント前書』2章10節以下。

23) ここでなぜ塗油(unctio)という言葉が使われているのだろうか。この段階でボナヴェントゥラは被造物としての人間の自力(自然本性, 努力, 探究, 雄弁, 言葉と書かれたもの, 被造物)の無力さを説き、神からの恵み(塗油, 内的喜び, 神の賜物すなわち聖霊, 創造の本質すなわち父と子と聖霊)に帰依することの重要性を強調している。序文4節(『南山神学』5号, P. 83), 第1章1節(『南山神学』7号, P. 112)及び第4章4節(『南山神学』9号, P. 127)参照。

ところで塗油は、臨終の塗油(extrema unctio)として七つの秘蹟(sacramentaすなわち洗礼・堅信・悔悛・臨終の塗油・聖体・叙階・結婚)のうちに数えられている(IV Sent. d.2, a.1, q.3 [IV 52-54])のであるから、秘蹟としての塗油の意味をボナヴェントゥラがどのように考えているかをみたい。

秘蹟とは、信仰をもって受けられるならば効力を発揮する徴し(signum)であり(Ibid., d.1, p.1, a. uni. q.2 [IV 13-15]), その制定は不可避というよりむしろ神の慈しみと正義と知恵のゆえに、病める人間のために適切なことであった(Ibid., q.1 [IV 12])。従って秘蹟は医薬(medicina)・治療薬(remedia)とされるが、その治療は原罪とその結果たる罪や弱さ・悪意・無知という病弱(infirmities)に向けられる(Ibid., d.2, a.1, q.3 Resp. [IV 53])。

しかしながら、現世にある限り、人間は完全に療されることができず(quodam modo incurabilis), 常に罪の病い(morbus peccati)持ちであり、小さな罪(peccatum veniale)から離れえず(inseparabilis), これを繰り返さずにいられない(quodam necessitate iterabilis)。秘蹟は全てこうした人生の途上にある人間の治療に多かれ少なかれ効力を発揮する。しかし、この世を去ろうとする人間が再び罪を犯すことがないように、神の慈しみによって臨終の塗油の秘蹟が制定された。これによって人は魂が療され、小罪の赦しと、罪の一部の免除を受ける。(Ibid., d.23, a.1, q.1 Resp. [IV 588a-589b])。

ところで小罪は魂を圧迫し下方に引きずり降ろし、敬信と愛を以て神に向うこと

ができないようにする。なぜなら、移り過ぎゆく善にふしだらに向い、神を愛することが少なくなるようにするからである。かかる小罪の治療にあたる臨終の塗油の秘蹟は、反対に、肉体の重みに圧迫される魂を敬信によって上方に高める。そして魂は力を受け、これによって小罪から解き放たれ、更に魂に有益であれば肉体の苦しみが軽減される。従って、この秘蹟は、肉体の病というよりも本来精神の病（つまり小罪）の治療と軽減にあたるのである（*istud Sacramentum principaliter est ad curationem et alleviationem infirmitatis spiritualis, scilicet peccati venialis*）（*Ibid.* [IV 589a]）。

それゆえ、この秘蹟において油を塗ることは徴しであり、小罪の療しは実際に起る事であり、敬信の情がかき立てられるということが実際に起り（療しの）徴しとなる。これこそがある意味での霊的塗油である（*Signum tantum est unctio exterior, res tantum est venialis curatio, res et signum ipsa in anima devotionis excitatio, quae non est aliud quam quaedam spiritualis unctio*）（*Ibid.* [IV 589b]）。

以上のような臨終の塗油に関するボナヴェントゥラの説明を見れば、彼がこの最終段階で塗油という言葉（^{こころ}）を二度も（もう一度は6節）用いる意図は明らかである。すなわち、現世でこの段階に到達する為に、被造の一切のもの（自力の努力も他の被造物の助けも）は無力である。神の恩寵に自己を委ね、自己を超えて神に向い、神に憩うためには、キリストと共に被造物と自己に死し葬られねばならない（2節、6節）。この精神的死への旅路の助けとして精神的塗油（*spiritualis unctio*）が考えられている。

- 24) ボナヴェントゥラは『命題集註解』において（*I Sent.*, d.23, a.1, q.3 [I 408-410]）、「本質という名称を神の事柄に用いるべきであるか」（*utrum nomen essentiae dici debeat in divinis*）と問うている。そこで彼は、神について通常用いられる他の三つの語（*substantia, subsistentia, persona*）とともにこれら四語に対応するギリシャ語を先ず挙げ、これらの神学用語が神の名称としてどのように用いられているかを、先ず諸説を披露し、続いて自説を述べている。彼の説によれば、*essentia* は *substantia* と共に、神の一であることに対して付される名称であり（*subsistentia* と *persona* は三位に対して付される）、*substantia* が具体的に表わすのに対して、*essentia* は抽象的に表わすという違いがある。

（*Ad praedictorum intelligentiam est notandum, quod ista quatuor nomina sive vocabula respondent quatuor vocabulis in Graeco, quae sunt : usia, usiosis, hypostasis et prosopon, ut usia respondeat essentiae, usiosis substantiae, hypostasis subsistentiae et prosopon personae. . .*）

Et propterea *quartus* modus dicendi est, quod cum fides dicat, Deum esse trinum et unum, in quantum dicit *unum*, non possumus intelligere unum, quin intelligamus *quod est et quo est unum* ; et *quo est unum* est illud *quo est*, et *quod est unum* est illud *quod est*. Primum est *essentia*, secundum *substantia*. Si

intelligimus *trinum*, necesse est, quod intelligamus eum *qui* distinguitur, et *quo* distinguitur. *Quo* distinguitur est proprietas; ille autem *qui* distinguitur semper significatur ut distinctus. Et hoc potest esse dupliciter: vel distinctus proprietate *quacumque*, vel ut distinctus proprietate *nobili* sive notabili. Primum significatur nomine *subsistentiae* quae dicitur prima substantia, et convenit non tantum individuo hominis, sed etiam asini. Secundum significatur per hoc nomen *persona*, quod importat nobilem proprietatem et non convenit nisi supposito rationalis creaturae. Quia Graeci utuntur nomine *hypostasis*, sicut nos nomine *personae*, ideo dicit Boethius, quod Graeci utuntur nomine *hypostasis* pro supposito rationalis naturae. . . . [I 409-410])

- 25) invisibles intellectus. ギリシャ語の原文(τῶν ἀνομμάτων νόας) (PG3 997) からすれば、盲目の知性と訳すべきであろうが、F₁以外はラテン語の引用通りに、los entendimientos invisibles (S), the invisible intellects (E₁), invisible intellects (E₂), the invisible mind (E₃), the invisible needs (E₄), die unsichtbaren Geister (D₁), die unsichtbaren Vernünfte (D₂), les intelligences des bienheureux invisibles (F₂)と訳している。F₁は原文の意味を考慮して les intelligences qui ont renoncé à la vue sensible と訳している。
- 26) 『神秘神学』第1章第1節 (PG3 997)。
- 27) 同処。(PG3 997-9)。引用はヨハネス・スコトゥス・エリウゲナのラテン語訳であり、ボナヴェントゥラはギリシャ語の原文を有たなかった。(F₁)
- 28) excessivis unctionibus。
- 29) 『イザヤ書』31章9節。E₄は、ボナヴェントゥラの源泉はサン・ヴィクトルのリカルドゥスの *Benjamin Major* (Cf. 196, 149)の可能性があると指摘している (P. 89)。
- 30) 『ヨブ記』7章15節。suspendium (絞殺)という言葉はここで比喩的に二重の意味で用いられていると考えることができよう。つまり、精神的死とそれを通して神に向って高められるということがここで意味されていよう。本章第2節に「十字架に架けられたお方を (eum in cruce suspensum)」と suspendere の語が用いられている。なお序文第2・第3節に suspensio という言葉が用いられているし (『南山神学』5号, P. 82, P. 86), また第4章4節に suspensiones excessuum という言葉がみられる (『南山神学』第9号, P. 127)。殆んどの翻訳は文字通りに絞殺と訳している中で (hanging [E₁, E₂, E₃, E₄], el suplicio [S], Erstickung [D₂], erwürgt zu werden [D₁]), フランス語訳は精神の高揚の意味で訳している (“Mon âme a souhaité prendre son vol” [F₁], “Mon âme a désiré s’élever au-dessus de ce monde” [F₂])。
- 31) 『出エジプト記』33章20節。
- 32) 『ヨハネ福音書』13章1節。

- 33) 『同書』 14 章 8 節。
- 34) 『コリント後書』 12 章 9 節。
- 35) 『詩篇』 72, 26 節。
- 36) 『同書』 105, 48 節。

The Soul's Journey to God (7)

A Translation with Notes and Commentary

of St. Bonaventure's *Itinerarium mentis in Deum*, Chapter 7

Hisako NAGAKURA

Longing for peace of mind, Saint Bonaventure went up to Mt. Alverna, where he meditated on the journey of the spirit to God, calling to mind the miraculous event of the stigmata given to Saint Francis on this very mountain. (Cf. the Prologue, whose translation in Japanese with notes and commentary is found in *Nanzan Shingaku*, No. 5). As the General of the Order of Saint Francis, Bonaventure desired to encourage the spiritual sons of Assisi to follow their spiritual father on the way of contemplation up to the height of spiritual ecstasis. For this purpose Bonaventure had recourse to his wide philosophical and theological learning. We have seen Bonaventure invite his readers to contemplate God in and through the sensible world (Chapters 1 and 2), in and through the inner world of the human mind (Chapters 3 and 4), then to contemplate the divine unity by analysing the first name attributed to God, *Esse* (Chapter 5), and finally to reflect on the divine Trinity by thinking about the title "Good" as applied to God. All through his journey, Bonaventure insisted on the importance of prayer. While one must fully use all the intellectual powers given to human nature, divine grace is also needed. In this final stage, however, he insists on the helplessness of all human powers. In this stage of ecstasis, where the human intellect rests in quiet and human affections are transported to God, Jesus Christ is the only ladder and vehicle to lead

man to the transcendent God. In this final chapter we see many sentences which recall the Prologue, and the reader realises that the intention of Saint Bonaventure for this writing is well accomplished.